

省みて省く

堀田 正行

一國の總理にとつて大切な要素は、歴史上の時代を巨視的に、かつ複眼的に見る目を持ち、そこから政治、經濟、外交の流れを大局的に把握する感覺である。昭和三十五年池田内閣の官房長官を振り出しに外相、党政調會長、通産相、蔵相、幹事長を歴任して宰相の座につかれた大平さんは、まことにこの感覺の持ち主であつた。かつてキッシンジャー米國務長官が大平さんを高く評價したことがある。外交においては、たとえ合意の達成ができなくても、お互いの立場を理解し合つてゐることが不可欠であり、相互の理解と信頼こそがもっとも重要であるとした大平さんの見解に、キッシンジャー氏が大平さんの人間性の大を見抜いてゐた所以かと思われる。そして今あの大樹は歴史上の巨像として見返らねばならない。

私は大平さんと郷里を同じくする關係で、早くから京阪神大平後援会を結成して微力ながらご支援を続けていたもので、大平さんに接する機会も多く、その人となりの謹嚴誠実で非凡な政治的才能に対しては限りない尊敬と敬愛の念禁じがたいものがあつた。大平さん急逝の後に見られた大いなる保守への回帰という結果は、日頃から政治勢力の細分化を心配し屋台骨のない政治機能の欠落をなげいておられた姿勢に対する大衆の共鳴であり、その政治的非凡を証するものであると思つ。また大平さんは友情に厚く、こよなく郷土を愛し、多くの県民から慈父のごとく慕われていたものである。かつて県人有志が相寄つて大平さんに関西へお迎えして、お好きなゴルフで心の安らぐ時を持っていたのだが、その時、總理總裁の座につくのとハンデ二十を切るのとどちらが早い

かと冗談をとばしたのも、今は忘れられない思い出となっている。また、大平さんの私宅へは生前よく訪問させていただいたものだが、大抵は朝早いことが多く、そんなときの大平さんは普段着の和服姿でにこやかな表情で現われ、朝食をすすめられたことがたびたびであった。朝食といってもほんとにお茶漬での歓談であつて、大平さんの気さくな人柄の一面が今もって懐しく偲ばれるのである。

たしか昭和四十九年の参議院選挙のことであつたと思うが、大阪心齋橋の一隅で大平さんの街頭演説に同行したとき非常に驚いた記憶が残っている。よく寡黙の政治家といわれたのであるが、一国の現状を憂い将来に思いを馳せ国民生活の幸福を願う、切々として一語一語かみしめた情熱あふれる流麗にして迫力ある日本語には、ただただ目を見張る思いがしたのである。おもつに大平さんの寡黙はその深い思想に根ざしたものであり、豊かな論理性が言葉となつて出てくるまでの長い思考の時間であつたのだと思われる。

大平さんが感銘を受けた言葉として、その随筆の中に次の一文を引用しておられる。「人間は自然の理でいつの間にか煩惱になるから、それをかえりみて、雑念、雑想、雑事をはぶいてゆくのが道義である。政治もまた然り」。省みて省く、この慎重な姿勢が寡黙であるように見せ、また艱難に遇つて黙々として耐える大平さんの政治哲学も、このあたりにあつたのではなからうか。

私人としての大平さんは、過密スケジュールの連続である激務から解放されて好きな読書などを楽しむ人生に身を置いて、もしそのまま人生の終着点にたどりつくということになつても悔いることはない、とする人生哲学を持つておられたと聞いている。しかるに宿命というべきか、国際国内とも政治が最も難局に直面している時に、天は大平さんを一国の運命を決断する要職に就かせ、過労と心労のうちに真の大平政治を具現する希望が開けた矢先、神は大平さんを天国に召されたのである。